

小説「野菊の墓」

2018年12月

我部山 民樹

2018年11月7日に‘いきいき大学の教養文化教室’の野外セミナー「文学散歩」で山武市（旧成東町）にある伊藤佐千夫の生家に隣接する山武市歴史民族資料館、伊藤佐千夫記念公園を訪問



ご案内の詩人・歌人の中谷順子先生（いきいき大学の講師）から、資料館で伺った話と、‘野菊の墓’の現代語版（現代語で読む野菊の墓—株式会社理論社）を読んで、また、ネットで調査して以下のようなことが分った。

- ・政夫（満13歳）と従姉の民子（満15歳）の初恋物語で、二人の結婚は許されなかった。嫁いだ民子の死で悲恋に終わる。ツルゲーネフの‘初恋’に触発されて書いたと言われている。野菊の花と矢切の渡しの設定が物語を盛り上げている。

- ・作者の初恋の体験小説と推測されているが、民子のモデルは分からない。5人ほどの候補がいるらしい。（自称も含めて）佐千夫との関係がばれて伊藤家を追い出された女中の戸村ふじもその一人。その後も‘おふじ’は佐千夫の愛人続けている。モデルに相応しくない？（おふじは成東町の浪切不動院に隣接していた鉾泉温泉旅館の成東館の髪結いをしていて、佐千夫がそこでたびたび歌会を催して、おふじに会いに行っていた。成東館は現存しない。）

- ・佐千夫は正岡子規の門人で、明治 39 年に、子規が松山で創刊した‘ホトトギス’に‘野菊の墓’を発表。当時、大反響を受けていた夏目漱石の‘吾輩は猫である’を連載中で、ホトトギスはよく読まれていた。同時期に‘野菊の墓’も寄稿したので、多くの人に読まれた？

漱石が作品を絶賛した。

菊は外来種で、野生種の野菊は無い。野菊とは菊に似た野生の花の総称で、ヨメナ、カントウヨメナ、ノコンギク、シラヤマギク、シロヨメナ、紫苑などをいう。文中には‘白い野菊’、‘野菊がよろよろと咲いている’とある。また、‘民子は野菊の生まれ変わり’とあり、民子は、可憐で、気品があって、控えめで、忍耐強く、けなげで、易しい女性として描かれている。野菊に例えるのはふさわしいと思われる。しかし、このような設定の民子役を演じられる女優がいるのだろうか？

小説の野菊の花はヤマジギクか？それともノコンギク、カントウヨメナだろうか？いずれもうす紫色の花であり白に見える。記念館に植わっていたのはヨメナ？



生家の周辺にも小説の舞台の矢切（の渡し）にも野菊は咲いていなかったらしい。母親がまだ菊が咲いていないので、代わりに紫苑を摘んでくるように二人に指示する場面がある。紫苑の花の色が白とはいえないだろうし、民子が‘野

・映画の配役

S30年 野菊の如き君なりき

有田紀子

田中晋二

2012年にDVDになる

S41年 野菊のごとき君なりき

安田道代

大田博之

人気出ず。DVD無し

S56年 野菊の墓

松田聖子

桑原正

原作を変えている。DVD有り

・テレビドラマの配役

S52年野菊の墓

(テレ朝のドラマ)

山口百恵

原作に忠実。DVD有り

絶賛されて、最高視聴率だったらしい。演じた女優の中で、山口百恵が民子像に最も近いかな？



他に津村悠子、宮裕子、二木てるみ、岡崎由紀、黒沢あすか等が演じている。

- ・ツルゲーネフの‘初恋’

隣に引っ越してきた年上の女性に初恋をする。多くの男を弄ぶような女性だ。ある日、主人公はその女性に男ができたと思われるので、相手の正体を知るべく、張り込む。驚くことにその相手は自分の父親だった。そんな彼女でも主人公は変わらず慕っていた。後日、彼女が結婚したこと、住所を知り、会い行こうとした。が、先延ばししているうちに、彼女が急死してしまったのを知り、結局会えなかった。半自伝的小説と言われているらしい。そのような実経験の所為か？は分からないが、作者は一生独身だった。

- ・佐千夫の牧場

1885年に上京し、本所区茅場町（現在の墨田区江東橋）で牛を飼い、牛乳屋を始める。30才の頃から、短歌を始め、正岡子規の門人になる。正岡子規は日頃から佐千夫を名前ではなく‘牛飼い’と呼んでいたらしい。

- ・佐千夫の小説

20作品ほど書いたが、処女作の‘野菊の墓’以外の評判は芳しく無かったらしい。

- ・‘政夫と民子の像’

伊藤佐千夫記念公園内にある。民子は清楚な感じがする。モデルは一体、誰？



以上